



令和4年度

鹿児島県の教育

7月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部会会長
迫田博幸

養護学校から 特別支援学校へ

鹿児島県立鹿児島養護学校校長
迫田博幸

本年四月、県教育委員会は県内の養護学校の名称を令和五年度から「特別支援学校」に変更すると発表した。

本県の県立養護学校の歴史を少し振り返る。県内初の養護学校の開校は昭和四十一年の鹿児島養護学校で、肢体不自由の児童生徒七十六人でのスタートであった。その後、昭和四十八年に知的障害者を対象にした串木野養護学校、昭和五十年代に入り、病弱者を対象にした指宿養護学校及び同加治木分校（現加治木養護学校）、中種子養護学校、鹿屋養護学校、大島養護学校と次々と開校した。

そして昭和五十四年、養護学校の義務化に伴い、武岡台養護学校、牧之原養護学校、南薩養護学校、皆与志養護学校、串木野養護学校川内分校（平成十一年閉校）が開校し、さらに昭和五十八年に伊敷養護学校（現桜丘養護学校）、平成十二年に九州初の知肢併置校として出水養護学校、平成二十四年に軽度の知的障害者を対象にした鹿児島高等特別支援学校が開校した。

養護学校設置以降、各学校が対象とする障害の特性に配慮し、地域の特色等を生かしながら、教育活動の充実が図られてきた中で、平成十九年四月に改正学校教育法が施行された。これにより、制度上は盲・聾・養護学校から特別支援学校へ改称され、一つの学校で複数の障害種の受入が可能となったが、本県にお

いて学校の名称は養護学校のまま現在に至っている。

今回の名称変更は、県内各地の養護学校で複数の障害種を受け入れてきたことにより、養護学校が障害の多様化や地域のニーズに 대응してきたことによるものと考えられる。

「養護学校は、この子たちが、人間として生きるための力を養わなければならない。したがって、学習も真剣であり、いかげんなことではすまされない。力の限りをつくして、はじめから身につくものだといつてよい。特殊教育にたずさわる教師は、少なくとも、一人の人間の可能性を信じ、そのために、情熱をつぎ込むところに尊い使命を感じなければできない仕事である。ひとりの子どもの可能性をどこまで引き出してやれるか、これこそ養護学校教師に課せられた課題である。」

これは鹿児島養護学校初代校長であり、障害児教育の先駆者である荒田静先生が、養護学校義務化直前に「養護学校の義務制と将来」と題して執筆された文章からの抜粋である。

養護学校から特別支援学校に名称が変わっても、その根幹は変わらない。障害のあるすべての児童生徒の持っている力を最大限に伸ばし、自立と社会参加を図るためには、児童生徒の可能性を信じて真摯に、この教育に取り組むことが大切である。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団県校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和4(2022)年7月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



若いころの動機づけ

指宿海上ホテル
代表取締役社長 西 浩 二

略 歴

一九七八年 国立海技大学卒業
一九八八年 三光汽船(株)入社 航海士勤務
二〇〇八年 指宿海上ホテル(株) 社長就任
公益社団法人指宿市観光協会副会長

私はかつてお節の生産で有名な指宿市山川の港町で生まれ、卒業した旧山川中学校は三年生の教室が二階にあり、窓から見える大隅半島の山並みと錦江湾の海は日々変化に富み、眺めていても飽きることもない風景がありました。放課後の校庭で元気な歓声が聞こえる学び舎が気に入りで、授業中も喜入の石油基地に向かう大型タンカー船がよく見えて先生の話はそこそこにはぼんやりと行き交う船を見るのが好きな生徒でした。「いつか僕もあんな大きな船に乗って世界の海をめぐるみたいな」と言う夢を抱くようになります。

しかし、人生は面白いもので、その十一年後の二十六歳の時にベルシヤ湾から原油を運ぶ四十二万トンの大型タンカー船の航海士として、喜入に入港することになります。山川沖を通過しながら、手に取る双眼鏡に映る白い校舎を見つめながら、楽しく遊んだ頃の友、家族を思い心の高鳴りを感じたことを今も鮮明に覚えています。そして思うと若い頃の環境と動機づけは人生に大きな影響を与えていくものだと気づかされます。二つの話を紹介させていただきます。

一つ目は、十年を迎えた「(株)指商」です。私は現在、指宿の観光業に携わる傍ら、市立指

宿商業高校が全国で初めて株式会社を立ち上げた時に取締役に務めさせていただき今に至っております。

「(株)指商」の生徒たちの発想はとてもユニークで毎回驚かされます。毎年新学期に新しいチームが決まりますが、組織する執行部は三年生から一年生までの生徒の中から希望者を募ります。生徒で構成される統括事業本部執行役員は二十数名で、総務、企画、営業、経理に配属される本格的な株式会社です。全生徒は入校時千円を出資する「株主」となるので経営に対してはみな真剣です。なお出資した千円は卒業時に戻される仕組みになっています。指宿の素材を生かした商品を企画創造し、市内県内のメーカーと共同開発し商品化します。「そら豆プロジェクト」によるパンケーキであったり、コロナ感染防止のマスクであったり様々です。校内で開催される指商デパートでの販売、山形屋や鹿児島中央駅アミュプラザの販売活動などを通して、全員で売り上げを達成させ利益を生み出す努力をします。

一年間の活動は株主である全校生徒による株主総会を経て、毎年利益を出しこの十年間指宿市に税金を納め、市内の小・中学校に図書や寄付贈呈を続けている立派な優良企業です。

また野外活動として「CIP運動(茶いっぺ運動)」も行っており、JRの観光特急「指宿のたまて箱号」で訪れる観光客にお茶の振る舞いやお出迎えをする活動もしてくれております。言葉遣い、接客応対など感謝や喜びを通して、この十代の時に学ぶ実践行動はきっと将来の人生に何かを気づかせる動機付けになっていると思います。

二つ目は月刊誌の「致知」紹介です。「人間学を学ぶ月刊誌」として全国十一万人を超える購読者とファンを持ちます。近年は高校生や中学生にも読まれているようです。出稿される皆様は教育、文化、経済、国際政治で活躍されている重鎮の方々であったり歴史上の人物の掲載であったりします。

特に二十代、三十代の若い方々には森信三先生、坂村真民氏、稲盛和夫氏などのご著書は、できる限り若いうちから触れることをおすすめします。私は遅すぎました。「人生に一度なし、言葉は命、しつけの三原則、天から与えられた『封書』、その動機善なりや、人間いかに生きるべきか」など、これから生きる若い方々はもちろん、今を生きる我々に教訓とその示唆を与えてくれる道しるべになると信じたいと思います。



プラスの言葉がこだまする

鹿浦小(大) 池上 祥一郎

「大丈夫だった？」

「よくがんばったね！」

「その調子！」

「いいねー！」

「やればできるじゃん！」

本校職員が日々発するプラスの言葉が学校にこだまするたび、私も心が癒やされる。

教育現場には、「心理的安全性」が求められている。これが安定的に存在する学校の子どもたちは、失敗することを恐れない。学校に失敗を許容する雰囲気定着しているからだ。脳神経科学の分野でも「否定されない環境の中でこそ人が能力を発揮できる」とされている。子どもたちに主体的な学びを提供したいならば、まずこのことを学校が認識し、具体的な行動をとるべきであるというのが私の主張である。このことについて、「子どもを甘やかし過ぎるのは良くないのでは。」という指摘があるとす。この「甘やかす」というのは、おそらく「子どもの自立を阻害しうる教師の言動」を指すと思うが、目の前の子どもが出した結果や何かを懸命にがんばっている過程に対して、教師が相応の言葉かけをするのは当然なことで、特に、「自

己肯定感が低い子どもの割合が多い」状況下の学校では、プラスの言葉かけは必須である。また、子ども同士でのポジティブな言葉かけも欠かせない。

全校集会で私は「講話」をほとんどしない。集会を指導の場にしたくないからだ。この時間の私の役目は、子ども同士あるいは職員と子どもたちをつなぐファシリテーターである。全校児童と全職員が同じ空間に集う貴重な時間だからこそ、できるだけ双方向のやりとりを通して、自己理解や他者理解を促す時間を共に過ごす。また、子どもたちを目の前にして職員の自慢もする。「先生たちってすごいんだぞ。校長先生は先生たちも大好きだよ。」と。

教師は「指導」が好きである。自戒を込めて告白するが、私も子どもを褒めさせるといふ大義名分を振りかざし、たくさんの「指導」を行ってきた。しかし、実際行われていたことは、指導という名の糾弾であり一方的な断罪であった。いわゆる「教室マルチリトメント」であ



る。マルチリトメントは、主に親子間における児童虐待等を指す言葉として広く普及しているが、学校に当てはめると、教師の児童に対する不適切な指導・関わりもそれに当たると言える。例えば、一人のミスは全員のミスという「連帯責任」という考え方は、全くもって理不尽な言いがかりである。「そんなことしたら校長先生に言うよ。」と言うのは、虎の威を借る逃げの指導である。「もう知らない。さよなら。」と言うのは、ネグレクトである。指示に従わないからと子どもたちを怒鳴るのは、強要もしくは脅迫である。忘れ物をしたからと授業を受けさせないのは学習権の剥奪であり、その姿を周囲に見せているのなら名誉の毀損である。強い体を作るのだと子どもの実態を無視してハードなトレーニングをさせるのは、暴行である。

このような「よかれと思ってやる」という教師の指導観が、いつの間にか子どもたちの心理的安全性を奪っていることに教師は気付かない。なぜなら、「圧をかけることこそが指導である」という偏狭な思想が慣習として残っているからである。そろそろ、教育に携わるすべてがアップデートしなければ、学校に子どもたちの居場所はなくなってしまう。

この空気のこわばりを破壊すべく、先頭に立つべき者は校長である。だから、私は、贖罪の意識をもってこのミッションに当たりたいと思う今日この頃である。



業務改善をあきらめない

笠利中(大) 久津輪 修 一

二〇二一年三月、文科省は「#教師のバトン」プロジェクトを始めました。教職を目指す学生や社会人に、学校や教師の仕事の魅力や喜びなどを知ってもらうために始めたものでしたが、現場から届いたのは、長時間労働等に苦しむた

くさんの悲痛な声でした。確かに学校は大変で、改善が必要ことがたくさんあります。でも、大変だけれども、他の仕事では味わうことのできない魅力もたくさんあるはずです。それがあから私たちは教師という仕事を続けているのです。学校の大変な部分を改善し、学校に優秀な人材が集まるようにしなければなりません。

令和元年度から三年度までに「正規の勤務時間を超える勤務は月四十五時間以内」の達成率を一〇〇%に近づけることと、「教職員の八〇%が『業務改善が進んでいる』と実感」を達成することを目標に業務改善を行ってきました。果たしてその成果はどうだったのでしょうか。本当に十分に成果があったとは言えないのではないかと思います。「学校の業務改善なんて無理だ。」とあきらめムードの学校もあるのではないのでしょうか。でも、そんなことでは何も改

善できませんし、教師という仕事の魅力を伝えることはできません。だから、業務改善をあきらめるわけにはいきません。

これまでの業務改善の取組で気になっていることを二つあげてみます。

一つ目は、勤務実態調査が正確に記録されていないということ。これは働き方改革の目的や趣旨が十分に理解されず、「超過勤務月四十五時間以内」を見かけ上でも守りさえすれば良いと、手段が目的になってしまったのではないかと思います。実際、在校時間を実際よりも短く記入していたり、休日に部活動を実施しているにもかかわらず、在校時間が0時間になっていたりする個人記録を見たことがあります。勤務実態調査は、教職員の健康を守るために実施しているものです。万が一、過重労働のために倒れてしまい、仕事を続けられなくなったというときに、実際より短い時間で報告されたデータを基に公務災害の認定等が行われることになり、適切な補償や支援を受けることができなくなる可能性があります。業務改善にしっかりと取り組んでいくための一つの方策として、超過勤務時間月四十五時間にとらわれることなく、正確に報告

することが必要だと思えます。仕事をもち帰っている教職員も多いと思えます。持ち帰った仕事についても把握する必要があると思えます。正確に報告することで、超過勤務月四十五時間にどれほどの意味があるのかも、明確になっていくように思います。

二つ目は、ノー部活デーと定時退校日のことです。部活動のガイドラインは守られているのでしょうか。大抵は守られていると思うのですが、例えば、土曜と日曜に二日間続けて部活動の大会があるときなどが、難しいかもしれません。大会翌日の月曜は練習を休みにしても、その次の火曜から土曜まで連続で練習日になることがあるようです。ノー部活デーや定時退校日は週一回設定できているのでしょうか。「中学校ではそんなの無理」といって月一回しか設定していない学校があるようです。また、定時退校日に設定しているにも関わらず、部活動の練習をして、普段と全く変わらず、定時退校できていない学校もあるようです。私の現任校では、大変ありがたいことに、部活動ガイドラインは確実に守られ、ノー部活デー・定時退校日も、毎週確実に実施できています。だから、「中学校ではそんなの無理」というのは、部活動が好きで教師の言い訳なのだなと思うようになりました。

今回、業務改善について感じていることを書かせていただきました。学校により様々な実態や課題があると思います。業務改善をあきらめるのではなく、少しずつでも改善を図り、「教師は大変だよ。甘くはないよ。でも、教師にしかない魅力がいっぱいだよ。」と言えるようにしていきたいと思えます。



木の温もりの中 子どもも先生も行きたくなる 中谷小学校

中谷小(隅) 柳野 竜 生

一 はじめに

本校は、曾於市役所財部支所より北西に七kmの位置にあり、都城市に隣接している。美しい緑と水に恵まれた静かな中山間地に、とてもモダンな木造校舎がある。

学校経営に対して、プール掃除や法面の除草作業などに、学校応援団や福寿会(高齢者クラブ)をはじめ地域の皆様が、とても協力的な校区である。

児童数減少対策として導入した「清流の里山村留學制度」から「特認校制度」に切り替えた。今年度は、六名の校区外生を迎え入れ、児童数十七名の完全複式学級、職員数十名である。(内四名は、財部北小と兼務)

二 経営方針に基づくキャッチフレーズ

前年度、本校に着任し、キャッチフレーズを「木の温もりの中 子どもも先生も行きたくなる 中谷小学校」に変更した。木の温もりとは、前述したとてもモダンな木造校舎のことである。子どもたちだけでなく、先生方もやりがいをもち、楽しく学校生活を過ごし、また明日も学校に行きたいと思える学校にしたいという思いからである。具現化するため

三 できる喜び

の取組について述べる。

子どもたちが、わかった、できるようになったと実感できる授業が展開される必要がある。個性豊かな子どもたち、能力も一人一人違う。そこで、校内研修テーマを今年度から「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるための学習指導の在り方とは、タブレットの活用を通して」とした。早く課題が終わった子はタブレット問題に取り組み、まだの子には支援する。また、自分の考えをもち、他者と適切に伝え合う場や振り返りの場をもち、できる喜びが実感できるようにしている。

四 みんなで体験

月曜と木曜の朝活動をマイアッパタイムとして、ウェブ問題等に取り組ませている。その際、担任だけでなく、校長・教頭・支援員・養護教諭を各教室に配置している。

特色ある学校づくりとして、異年齢集団による各種の体験活動を実施している。

(一) そばの種蒔き・そば刈り・そば打ち・試食と、一連のそばづくり活動やキウイ狩り

(二) 一校一運動として一輪車に取り組み、一年生や特認生も含め全児童で、運動会での一輪車演技の披露

(三) 掃除や遊びなど、縦割り活動の実施
(四) 育成会と連携し、曾於市無形民俗文化財の奴踊りの伝承活動。国の天然記念物溝ノ

口洞穴で行われる岩穴まつりでの披露など
(五) 中谷の昔の様子などを教えていただいたり、グラウンドゴルフを一緒に楽しんだりする高齢者とのふれあい活動

(六) 中谷豊作祭での全児童によるステージ発表や鬼火焚きなど地域行事への参加

(七) PTA活動として、女子児童のフラダンス教室への参加

五 チーム中谷としての協働

よりよい学校経営の基盤は、職員同士の雰囲気づくりだと思う。積極的に話しかけコミュニケーションをとり、よい点をほめながら人間関係を築き、相談しやすい雰囲気づくりに努めている。また、一人で抱え込まず、みんなで協力できる体制づくりに努めている。そのことが、先生も行きたくなる中谷小学校につながると思う。

六 おわりに

タブレットが一人一台整備され、授業展開が、大きく様変わりしたように感じる。個別最適な学びを充実させ、できる喜びを感じさせるとともに、特色ある学校作りを充実させ、特認生も引き付けられるような魅力ある学校経営を進めていきたい。



豊かな心を持ち自ら学ぶたくましい生徒の育成

〈ひとみ輝く学校〉

阿久根中(北) 福島 慎一

一 はじめに

阿久根市は高地が大部分を占めて平地に乏しく、農地は全土の二十パーセント程度に過ぎないが、四十キロメートルに及ぶ海岸線は変化に富み、点在する島々は自然のうちに景勝の地を形成し、沿岸を洗う黒潮はいたるところに亜熱帯の植物を育み、気候温暖天然の恵み豊かな地である。そんな阿久根市の中心部にある本校は「豊かな心を持ち、自ら学ぶたくましい生徒の育成」を学校教育目標として「向学・友愛・自立」を校訓に「生徒・教師・保護者一人一人のひとみが輝き、すべてにわたって生き生きと活動する学校」を目指して、様々な教育活動に取り組んでいる。

二 学校経営の方針

これからの社会は、「知識基盤社会」「多文化共生社会」「情報化社会」など、変化がますます激しくなってくる。こうした社会を生き抜くためには、問題を解決するだけではなく、他者と共に新たな価値(学び、生き方、

考え方など)を創造していく子どもを育てていくことが大切である。

このことを踏まえて、教育目標や校訓をもとにした教育活動を保護者や地域と協力しながら充実していくことで、落ち着いた学校・学級で豊かな心を育みながら、学校が楽しいと感じられる生徒を育成していくことを目指し、キャッチフレーズを「ひとみ輝く学校」として学校経営を推進している。

三 教育目標達成のための取組

(一) プラン一【豊かな学力】

職員は「毎時間の授業で勝負する」を合言葉に校内研修のテーマを「ひとみ輝く生徒を育成する主体的・対話的で深い学びに立った教育の実践」と設定して、今年度は鹿児島県教育委員会が推進している北薩地区コアスクールプロジェクトのエリア推進スクールの指定を受けて、教科の枠を超えて教師一人一人が学び合い、子どもたちの視点から議論し合う校内研修を目指して、学力向上のための授業改善に努めている。

(二) プラン二【豊かな心】

生徒一人一人と誠実に寄り添い語り合いながら、基本的な生活習慣の確立として「心のこもったあいさつ」「時を守り、場を清め、礼を尽くす」「服装、身なりの徹底」「無言作業」などの共通実践事項を設定して取り組んでいる。特に本校の課題は不登校対策でもあることから、関係機関とも連携を図りながらチーム力を発揮するために生徒指導体制を確立していくことで、生徒の「高揚感」「有用感」「成就感」などの自己肯定感の醸成に努めている。

(三) プラン三【安心・安全と健康】

自分で自分の命や体を守ることを基本として、健康と安全は何よりも優先することを確認しながら、安全指導・安全管理の徹底に向けて月一回の学校安全の日を設定して安全点検・交通安全指導を実施している。また、体力・気力づくりの推進として、補助運動としての一校一運動や集団行動様式の習得、PTAと連携した「早寝・早起き・朝ごはん」の取組を推進している。

四 おわりに

四月に本校に赴任して、これから取り組まなければならないことがたくさんあるが、学校教育目標達成のために、知・徳・体を中心とした取組を行いながら、子どもたちが「阿中で学んで良かった」と思える学校経営を目指していきたい。

また、多くの教育活動の中で、職員が同僚性を発揮しながらチーム阿中の一員として取り組んでいけるように努めたい。



① かるあせ ② ららん輝く瞳

③ やさしい心 ④ まっすぐ育つ

平山小(始) 牧 本 佳代子

一 はじめに

標題は、本校のキャッチフレーズである。折句のように作つてあるが、「ひ・ら・や・ま」のめざす子どもたちの姿をよく表しているため、とても気に入っている。

本校は、北に霧島連山、南に鹿児島島の象徴桜島、東に荒磯岳を望む山峡にあり、水や空気が清らかな自然に恵まれた環境にある。星空の観察に適し、百武彗星発見の地としても有名である。また、季節ごとに美しい花が咲き誇り、「花の学校」と形容できるほどである。「センス・オブ・ワンダー(自然から受ける感動)」と「特認校、へき地、極小規模、複式指導」の特色を生かした教育活動を進めている。

二 取組の実際

(一) 種から育てる緑化活動

子どもの豊かな心を育むため学校緑化活動を推進し、全職員及び子どもたちで計画的に育苗、花壇作り、花壇管理を行っている。一人五鉢に季節の花を咲かせたり、自分たちで図案化した造形花壇を作ったりし

ている。種選びから育苗、栽培と花を育てる過程を記録することで「命を育む」ことを感得するとともに、理科学習にも役立っている。

日常的な緑化活動のために、毎週木曜日の清掃時間を「みどりの時間」と設定し、土作りやこまめな除草、灌水、定期的な観察記録の記入等行っている。また、花の名前を書いた札を付けることで、学校にある花の名前を覚え、愛着をもてるようになってきている。小さな「種から育てる緑化活動」を通して、子どもたちの「センス・オブ・ワンダー」を醸成している。

(二) 環境を生かした稲作体験

豊かな体験活動を味わいたくて本校に通っている特認の子どももいる。大きな学校ではなかなか体験できない年間を通した稲作体験と異年齢集団での活動が魅力的だと考える。

田植え前に泥田で行う「どろリンピック(泥の中での競技)」は、肌を感じる泥の感触を楽しみながら全身泥だらけになって競

技する姿は実に滑稽である。

田植えや稲刈り・掛け干し・脱穀等、地域の高齢者をゲストティーチャーとしてお願いをしている。高齢者が手際よく作業される姿、分かりやすく指導やアドバイスをくださる姿に子どもたちは尊敬の念を抱いている。また、その場がコミュニケーションの場ともなり、会話が弾んでいる。地域・保護者も一体となつて行う作業はとことん農業体験となつている。数年本校に通っている子どもは年々上達し、要領がよくなつてきた。

体験することでしか得られない苦労や喜びがある。額に汗して働く子どもたちの姿は、生き生きと輝いて見える。

こうして収穫した米は、県民週間に合わせて実施する学習発表会と地域の文化祭「平山祭り」で「彗星米」と銘打って販売している。生産から販売までの体験活動となる。巷では「おいしい。」と好評を得ている。

三 おわりに

毎月一回の全校朝会で、季節の花や植物を紹介するコーナーをつくっている。実物や写真を示しながら、名前の由来や花言葉、豆知識を話すことで子どもたちはより興味を示し、自然と関わりとうとする。恵まれた自然環境を活かした豊かな体験活動が本校の特色ある教育活動の一つである。今後も「学び」につながる体験活動を充実させていきたい。



郷土桜島を愛し、誇りをもたせる

郷土に根ざした教育活動の推進 キャッチフレーズ 不屈の桜島魂『やればできる』

東桜島中(市) 鬼塚 祥朗

一 はじめに

本校は、雄大な桜島南岳を背に、美しい錦江湾を眼前に眺められる豊かな自然に包まれた溶岩台地に位置している。全校生徒二十名の小規模校であり、一小一中の東桜島小学校及び校区内にある児童養護施設とも連携を図りながら教育活動を進めている。

また、桜島地区五小学校三中学校は、令和八年四月開校予定の義務教育学校に統合することが決まっている。だからこそ、郷土を知り、郷土を愛する生徒の育成が求められており、ひいては郷土に誇りを持ち、郷土に貢献しようとする人材の育成につなげていかなければならないと考える。

二 本校の特色ある活動

(一) 郷土を知る『ドリーム桜島タイム』

(総合的な学習の時間)

郷土桜島の自然・環境・伝統・観光等について、設定した課題をフィールドワークや調べ学習を通して追求していく。研究の成果は、文化祭で発表する。また昨年度は、

研究成果をもとに、沖縄県小浜中学校とリモートでの交流学习を実施した。

(二) 地域の特性を生かした『命を守る教育』

桜島は、大爆発や土石流など大きな被害を受ける可能性が高い地域である。また、学校の正面を走る国道は、桜島フェリーから大隅半島へつながる大動脈となっており、工事車両など交通量が終日多い。観光客も多く、カメラを向けられることもある。そこで本校では、命を守る教育及び防災・防犯教育に力を入れている。特に、生涯にわたって心豊かでしなやかに生き抜く生徒の育成を図り、心の健康に向き合う支援のあり方についての研究を進めている。

・桜島火山爆発総合防災訓練

・土砂災害避難確保訓練

・砂防会館での砂防教室

・防犯教室(不審者対応)

・交通安全教室

・救命救急教室(普通救命講習修了)

・心の健康(健康教室、生命尊重教育、が

(三) 地域との連携

ん教育、ストレスマネジメント等)等
本校の校区民や保護者は、学校教育に対する関心が高く、とても協力的である。学校としても、地域の行事や伝統芸能の継承等に地域と協力しながら積極的に取り組み、郷土についての理解を深め、郷土を大切にする態度を養っている。

また、令和四年度より東桜島小学校と合同で学校運営協議会を設置し、更に小中連携及び地域との連携を推進していく。

・林美美子忌のつどい

・地域とのふれあい

(地域貢献活動・海岸清掃等)

・小・中・地域合同秋季大運動会での

『島廻り節』

・コミュニティによるあいさつ運動等

三 おわりに

本校は、生徒数二十人の小規模校ではあるが、生徒会を中心に生徒一人一人が役目もこなし、その人数の少なさを全く感じさせないとても活気にあふれる学校である。だからこそ私は、常日頃から生徒たちに「東桜島中学校は、今のままでも素晴らしい学校だ」と思うが、佳き伝統を受け継ぐだけでは、何も変わらず、進歩はない。常にワンランクアップを目指して、いろいろなことに積極的に取り組んで欲しい。」と言い続けている。



「先生だからこそできることを」

永原小(始) 高岡和也

教員生活十一年目に、埋蔵文化財センターへ異動することになりました。考古学など学んだこともなく、全くの素人の私に発掘調査ができるのだろうかと不安でした。発掘現場は、九州新幹線に伴うもので、出水市にある遺跡で、職員が五名、発掘作業員の方が百名近くもいる大所帯でした。

学校生活とは違い、一緒に仕事をするのは大人ばかり、調査の対象は、物言わぬ土器や石器といった遺物、住居や土坑等の遺構たち。毎週が四泊五日の出張暮らし。これまでの生活とのギャップに戸惑っていました。

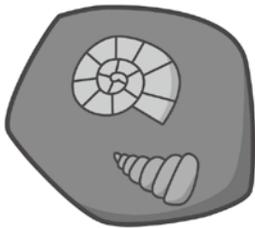
発掘現場のチーフは、私より二歳年上の方で、

子どもの頃から考古学に興味があり、大学で考古学を学び、知識や経験がとて豊かな方でした。出土した小さな土器片を「これは〇〇式土器です。△△遺跡の報告書に類例が出ていますよ。」などとすぐに答えてくださるのでした。

私が今からどんなに勉強しても、絶対にチーフのような知識や技量を持つて発掘調査はできないだろうと思いい、今後どのように調査に携わっていかねばいいのか悩み、チーフに相談をした時のことです。チーフは、「先生には、私と同じ事はしてもらわなくてもいいんです。私にはできない、先生だからこそできることをやってほしい。」とおっしゃるのです。その夜は、二人で色々語り合うことができました。

チーフが考えた調査方針をスムーズに進捗させるために、私が作業員さんの管理面を中心になつて行うことにしました。

平均年齢六十五歳以上の小学生よりもわがままで、個性豊かな百名のクラス担任として、『学級経営』を始めることになりました。



決められた時刻に
決められたことを黙々と

佐多小(隅) 上葉 智明

「校長や教頭などの管理職は、学校では毎朝、決められた時刻に決められたことを黙々と行うことが大切なんだ。」

私には鹿児島教育界に一人だけ血のつながる親戚がいる。四歳年上の従兄である。互いの家は遠いのだが、従兄の家は母の実家で、親同士仲が良かったこともあり、小さな頃から盆正月以外でも頻りに従兄の家に遊びに行き、まるで弟のように可愛がってもらってきた。

私が大学に入学した年に、従兄は県内の中学校で英語の教師として教員生活を始めた。それから、私が大学を卒業し、県内の教員として採用されて以降も、「教育とは何か」根源的なものをいつも教えてくれた。教員としての悩みなども、従兄に相談すれば解決の道筋が見えることがしばしばあった。いつの頃からか、従兄は私にとっての目標であり、道標みちしるべとなっていた。十一年前、私は新任教頭として教員人生の新たなステージを迎えることとなった。当時、行政職に就いていた従兄は、教頭としての心構えや行うべきことを教えてくれた。

冒頭の、管理職は毎朝決められた時刻に決められたことを黙々と行うことの大切さを説いてくれたのも、もちろん従兄だ。実際に教頭として赴任して以降、校長になった現在まで、赴任した学校の実態に即して、毎朝決められた時刻に決められたことを黙々と行ってきた。このことは、自分自身の心身の安定につながり、それは職員の心身の安定や安心につながる。職員の心身の安定や安心は児童の心身の安定や安心につながり、学校の安定につながることを実感している。

この文章は、来年三月に定年を迎える従兄のために書きました。

「学校は安全なところでなければならぬ」という前提

栗生小(熊) 池野 吉 寿

「学校は安全なところでなければなりません。」

これは初任校で、当時の教頭先生から頂いた、今でも肝に銘じている言葉である。

初任校は、奄美市(旧名瀬市)の大規模校。新採二年目に六年生の担任をしていた時のこと、ある日の昼休み、学級の男児が校庭でサッカーをして遊んでいた際、ボールを蹴ったあとバランスを崩して転倒し、右腕を骨折する大けがを負い入院した。ところが、翌日、再び事故が起きた。それも、同じ昼休みに外で遊んでいた別の男児が転倒し、右肘を捻挫したのだ。二日連続で同じようなことでけがをしたことは論を俵たないが、それよりも、子どもたちへの指導が心に届いていなかったことが何よりもショックだった。

自分の指導はどうだったのか、なぜ同じような事故が繰り返されたのかを自分なりにいろいろな角度から思いをめぐらせ、先輩教師にも指導を仰ぎ、発達段階に合わせた指導の大切さを学んだ。それ以来、言葉だけの指導ではなく、現場に子どもたちと向き、どんなことが起こりうるかをみんなで考えるようにした。この経験が、その後の危険予知に対する指導に生きているように思う。

本校では二年前に、川で遊んでいた児童の尊い命が奪われる痛ましい事故が発生した。事故の教訓を生かした安全指導はもとより、新型コロナウイルス感染症対策、熱中症対策等を含めた安心して生活できる学校・地域づくりを目指し、危機管理に取り組みたい。

本校ではキャッチフレーズ(愛言葉)として、「わくわく登校 いきいき学び にこにこ下校」を掲げている。子どもたちが一日の大半を過ごす学校という場所はどうありたいという思いを、実によく表していると感じる。毎朝の登校指導の際、子どもの登校に付き添ってくる保護者からの「お願いします」という何気ない言葉に身が引き締まる思いがする。

「大丈夫だあ」

加世田高 石谷 洋 一

今から二十年近く前、福島県郡山駅の新幹線ホームに降り立った私に、恩師がかけてくれた「大丈夫だあ。」のひとことを忘れることはないだろう。

恩師とは、私が高校三年生の時、教職員交流で福島から赴任された副担任の先生のことである。授業中のゆったりとした語り口、話される福島弁の一つ一つは、苦手教科であった英語に興味をもたせてくれた。時折発せられる「大丈夫だあ。」という言葉は、高校生の私にとって時には安心感を与え、時には背中を押してくれ

たように思える。

高校を卒業してから、ちょうど二十年が経ち教職員交流の機会をいただいた私は、縁あってその恩師が校長として勤務されている福島県の学校に赴任することになった。

初めて福島へ向かった三月三十一日、東京駅から午後六時過ぎの新幹線に乗車し、車窓から流れる景色をぼんやり眺めていると、時間が経つにつれ灯りの少ない世界が広がってきた。同時に窓からひんやりとした空気が感じられるようになり、友人や知人のいない地で果たしてやっつけていけるのかと徐々に不安が大きくなっていった。そのような中、郡山駅に到着したときかけてもらった「大丈夫だあ」のひとことが、私の心を軽くしてくれた。

今でも迷ったり不安になったりすることがある。そのとき、周囲からの「大丈夫」というひとことに励まされ、前に進むこともある。この言葉は誰かを励ましたり支えたり、また、時によって自分自身を奮起させる言葉にもなる。

新幹線ホームで迎えてくれた恩師は、その日に定年退職を迎えられた。教師生活の最後の日に、教え子のために駅まで足を運んでくださったことを本当に感謝している。私も『言葉』で人を支え優しく背中を押すことのできる教師でありたい。

ある日の校長講話



目標を達成するために大切なこと

生見小(市) 勝 本 祥 治

おはようございます。皆さんは、学習や生活、保健など一年間に様々な目標を立てていますが、目標を達成することができていますか。今日は目標を達成するために大切なことをお話します。メジャーリーグエンジェルスで大活躍し、昨年「年間最優秀選手賞」に輝いた二刀流の大谷翔平選手を知っていますね。その大谷選手は高校一年生の時に、「ドラフト一位八球団」という目標を立て、それを達成するために「体づくり」「メンタル」「人間性」「運」「変化球」「スピード百六十キロ」「キレ」「コントロール」の八つの要素を記入し、さらにこれらを達成するための具体的な行動目標を、それぞれ八つずつ立て、

実践してきたそうです。例えば「運」という要素を達成するための行動目標は、「あいさつ」「道具を大切に使う」「プラス思考」「ゴミ拾い」「応援される人間になる」「部屋掃除」「審判さんへの態度」「本を読む」です。「運は引き寄せられることができる」という教えを受けて記入したそうですが、野球の技術、心や体のトレーニングばかりではなく、このようなことまで実践していたことに驚かされます。そして、これらを意識せずに自然と行動できるようになり、どんなに理不尽な判定があっても、にこやかに対応する姿は、ファンを魅了していますね。

大谷選手は、高校卒業後、メジャーリーグでプレイすることを公言していたため、ドラフトで一位指名したのは、一球団だけでしたが、十分に目標を達成したのではないかと思います。ただすべてが順調に進んだわけではなく、右ひじの手術、リハビリを乗り越え現在があります。皆さんも目標を絵にかいた餅としないためにも、なりたい自分の姿を想像し、目標を立て、目標達成のためには何をすればよいかを具体的に考え、強い意志で努力を継続してください。そのことがきつと将来の支えになります。

「キラキラ輝く命」

永吉小(鹿) 祝 原 茂 博

風薫る五月、さわやかな風に青葉若葉のにおいを感じ、花や木、鳥や虫たちが成長する季節になりました。

校長先生の家の玄関の横にツバメが巣を作っています。夜、家に帰ると壁の横の蛍光灯の上にツバメの夫婦が寄り添って寝ていました。先生が返ってきたことにも気づかずにいるツバメを見て、「明日から巣作りの続きをするんだなあ。」と思いました。

朝、校庭に行くと、「四つ葉のクローバー見つけました。」と見せてくれた一年生がいました。また、校庭の芝生の上をカエルが跳びまわっていたり、青虫が地面を這ったりしていました。いつもの道、いつもの校庭、いつもの空のように見える、そこで生きた花や木、鳥や虫たちは休むことなく変化し、成長しています。自分の命を輝かせるために一生懸命、頑張っています。小さな命の頑張りに拍手を贈りたい気持ちです。

皆さんは、どうでしょう。新しい学年に進級

して一か月「今年はこのなことにがんばるぞ。」と目標に向かって頑張っていますか。できないところやうまくいかないところばかり気になって自信がもてないという人もいるでしょう。でも、皆さんの元気なあいさつや、学校生活の様子、授業中の様子、元気に遊んでいる様子や友達と交わす言葉遣いなどを見てみると皆さんの成長を感じられます。廊下の掲示板の作品を見ても、あなたたち一人一人の成長を確かに感じることが出来ます。自信を持ちましょう。でも、変化は自分ではなかなか気づかないものです。

そこで今週は、お友達の間で頑張っているところ、生き物が命を輝かせながら頑張っているところをお互いに伝え合ってみてはどうでしょう。たくさん見つけられるように、心の目や耳をはたかせてみてください。キラキラ輝く命を見つけたら私にも教えてください。楽しみにしています。

体いっぱい季節を感じて、心のアンテナを高く、今週も元気にキラキラ過ごしましょう。

そこが〇〇さんのいいところ

神之嶺小(大) 塩 屋 豪 毅

六年生のみなさん、他己紹介って知っていますか。自己紹介は知っていますよね。他己紹介は自分以外の仲間のことを紹介することです。これは相手のことをよく知っていないとできません。相手がどのような人なのか、趣味や好きなことなど、多くの観点から見た特徴をほかの人に分かるように伝えないとけません。

他己紹介の目的は、相手を知ること以外にお互いの信頼関係をより深めるということもあります。自分自身のことを他の人に紹介してもらうことで、自分のことを知るよききっかけになります。自分では大したことではないと思っているようなことでも、周りに感謝されたり、自分では気付かなかった長所を発見したりすることにもつながります。自分のことを相手に認識されて初めて自分がどんな人間なのか知ることが出来ると思います。

他己紹介のこつは、相手の良いところをたくさん紹介することです。周りの人が知らないような、その人の特徴や優れているところや素敵だなと思うところを取り上げてみましょう。そ

うすること、人間関係もより良くなります。紹介されている本人も聞いている人も、心が温かくなるような紹介をしましょう。

一 紹介する人物について情報収集する。

二 収集した情報をもとに紹介文を作成する。

三 紹介文をもとにみんなに紹介する。

(子どもの感想)

〇〇さんともっと仲良くなれた。

みんなのことをもっと知ることができた。

他の人のことももっと知りたい。

他已紹介、楽しんでもらえましたか。他の人

に自分を紹介してもらうことで、自分自身にも新たな発見があったのではないでしょうか。

今日の発見はほんの一部です。ぜひ、これからもお互いに交流を重ねて、学級の絆を深めていってください。そして、もっともっとすばらしい学級を作っていきましょう。



話のひろば

ひろば

十一年目の挑戦

蔵島小(北)

石原近子

川底を熱心に覗き

込む子ども、「ここに

魚がいたよ。」と興奮

して友達に教える子

ども。楽しそうな笑

い声。生活科

の学習の一場面である。

ただ、一つ違うのは、

これが五つの小学校による集合学習の授業風景

と違うことだ。他校の子どもたちといつの間に

かペアやグループになり、活動に没頭している。

自然と対話が生まれ、教師の支援でさらに発展

していく。そのような姿があちこちで見られる。

五月下旬の二日間、出水市内五校の小学校に

よる集合学習が行われた。この集合学習は、平

成二十四年にスタートした。きめ細やかな個別

指導が可能となる小規模の良さを十分に残しな

がら小規模校では体験できない同学年による学

び合い、人間関係づくりを目的として始まった。

児童減に伴う学校の統廃合が進む中、別の可能

性を模索した存続への挑戦である。今年で十一年目を迎え、年間五回開催し、三校が会場校となる。学校のすぐ横を川が流れる学校、ラムサール条約に登録された湿地が校区にある学校、県境にある学校と、それぞれ特色があり、その環境を生かした学習を展開することが可能となる。この集合学習は子どもたちにとって最適な学びの場を提供することができる。

この効果は教職員にも波及する。確かに様々な準備を要し、負担もあるが、担当する授業づくりや相互の授業参観、放課後の研修等を通して、教員同士が切磋琢磨し、成長できる機会となる。この集合学習を通して、子どもだけでなく、教員同士も絆が深まる。

今年、校長として集合学習に携わることとなった。コロナ感染の状況を確認しながら実施の在り方を検討した。分散会場の準備、端末が活用できる環境作り等、関係機関の協力を得ながら実施した。校長としての判断、全体を見通した配慮等、打ち合わせから当日の運営までを通して学ぶことが多くあった。今回の集合学習での成果と課題を明確にし、改善を図りながら、さらに充実したものにしていきたい。十一年目の挑戦は始まったばかりである。

非常事態時の

学校の役割

名柄小中(大)

迫田尚久

奄美群島とトカラ

一月十六日未明、

けたたましい緊急

アラートと防災無

線放送で目覚めた。

午前四時半頃、

役場から区長さんを通じて、

学校を避難所として開設する依頼があった。避難指示が出ているなか、海に面している学校に行くことは大変不安だった。学校に移動してきたのは、二十名程度だった。

列島に津波警報が発令されたからだ。テレビの情報では高台への避難指示が出されている。住宅を出てすぐに教頭に出会い、学校の津波避難訓練で避難する所まで山道を上った。集落の方

の多くは車で海が見える高台の方へ移動していた。その後、私たちも消防団の指示でそこへ移動した。さすがに一月にハブは出てこないとは思うものの山の中の道は不安だった。

高齢者の多い集落である。消防団や保護者の方は高台に避難していない方の安否確認するために何度も車で行き来していた。こんな時、学校の管理職としては何もすることができず、児童生徒や集落に住む職員の避難状況を教頭と確認するしかなかった。

私の住む集落は、携帯電話の電波状況が悪く、学校や住宅で通話する際は電波を求めて移動しなければならぬ。幸い避難先は見晴らしのいい高台だったためアプリでラジオを聞くことができたが、こんな時に限って充電も残りわずかである。車で避難された方の多くは、車の中で過ごされていたが、トイレや水分確保のため、家に戻る状況も見られた。

示解除の防災放送があったが、避難所閉所の指示はいつまでたってもこないため、他校と連絡し、役場に指示を仰いだ。

今回の事例では、防災に対する多くの課題に気づかされた。学校は、避難所として指定されているものの、その運営方法については一切知らされていない。後日、村の方で安全対策について協議がなされ、今後は校長代表者もその協議に出席することになった。

今回の事例を通して、一番不安だったことは、情報や連絡がないなかで管理職はどのように動けばよかつたのか分からなかったことである。管理職としての危機意識が欠如していたと反省した。児童生徒と教職員の生命を守るために、事前に災害に対する事前の準備が必要であると強く思った。

鹿児島市での会合が終わり、天文館のラーメン店でチャールハンセットを食べ終わって幸

優勝する準備の

ためにやってきた

東串良中(隅)

西田昌史

鹿児島市での会

福感に満たされていた帰り道。大勢の人が天文館公園内に集まっていた。何が始まるのか分からなかったが、人の流れに乗って私も天文館公園のステージ近くに行って来た。程なくアナウンスが始まり、これからラグビーワールドカップに出場する南アフリカ代表の歓迎セレモニーが始まることを知った。

二〇一九年日本で開催されるラグビーワールドカップの調整のため、南アフリカ代表は来鹿した。その歓迎セレモニーをたまたま見る事ができたのだ。セレモニーでは、選手紹介や激励の挨拶などが行われたが、私はその中で特に覚えているシーンがある。チームのヘッドコーチが「優勝するためには準備がとても大切だ。そして優勝する準備のために我々は鹿児島にやってきた。」と挨拶した場面だ。その言葉を聞いた時、鹿児島を大切に考えてくれていると感じうれしかった。と同時に、代表チームのヘッドコーチが準備の大切さを説いたことにハッとさせられた。ワールドカップで南アフリカが世界一となった後、ヘッドコーチの言葉は更にすこみを増して私の心に残っている。

鹿児島市での会合が終わり、天文館のラーメン店でチャールハンセットを食べ終わって幸

物事をなすために準備が大切だということ
は、ヘッドコーチの言葉を借りなくとも当たり
前のこととして理解している。それでも心に
残っているのは、世界一のヘッドコーチでも当
たり前のことを大切にしていないと感じたから
だ。転じて私はというと、準備をおろそかにし
て失敗したことが数多くある。しかも同じよう
な準備不足による失敗を繰り返している。思い
出すだけでぞっとする。

今は計画案を見ると準備の期間や内容を考え
るようにしている。それでも準備不足だったな
と反省することがある。そのたびにヘッドコー
チの言葉が頭をよぎる。準備は面白くもなく大
変なことが多い。しかし、物事をなす喜びを最
高のものにするため
には、これからも準
備、準備、また準備
を進めていかなけれ
ばならない。準備の大
切さを忘れないため
に、袋麺でも、イン
スタントでも、お店
でもラーメンを食べ
たときは必ず思い出
すようにしている。



読書案内



■桑原晃弥 著

「松下幸之助

「困難を乗り越えるリーダー」に
なれる七つのすごい!習慣」

大浦小(南) 岡元 照代

松下氏は二十世紀の日本で最も成功した経営者として知られ、「経営の神様」とも呼ばれている。本書は社員五人の会社を社員二十五万人超の企業に成功させたノウハウ九十一例が紹介されている。学校経営を推進するにあたり、共感できることが数多く示されていた。

著書の中で特に印象的だった二つを挙げる。一つ目は「部下を信じ、部下を頼り、部下に知恵をもらうリーダーになれ」である。上に立つには才能も才覚も求められるが、それ以上に部

下を信じ、部下を頼り、自分の力に部下の知恵とやる気を加えることが重要であり、それを引き出す配慮が必要であると説く。学校も同様で、部下の数だけ知恵があり、部下の持ち味を生かせるかは校長の手腕にかかっている。

二つ目は「うまくいっていない部下には『見守る』ではなく、具体的な指示を出す』である。「任せる」は「任せっぱなし」を意味しない。任せた人間がしっかり結果を出せるよう手助けしてこそ、本当の意味で「任せた」ことになる。と説く。つまり、仕事の状況をみて、「見守る」べきか「指示を出す」べきか判断し、適切な対応が必要なのである。その見極めが肝心であり、いつ、どう指示を出すかは、悩むところである。動きをじっと待つとき、即、指示を出すとき、そのタイミングや指示の出し方が重要だが、なかなかうまくいかない。

最後に著者は「自分には与えられた道があると覚悟を決め、一步一步懸命に歩むことである」で本書を閉じている。松下氏は八人兄弟の末っ子で、貧乏のどん底生活を送っている。彼の成功を支えたのは、愚直で地道な歩みと決して軽々しく諦めない精神的強さだとも述べている。困難な状況下でも、部下に知恵をもらい、状況に応じた適切な指示を出せる校長をめざし、一步一步歩んでいきたい。

笠倉出版社 八百九十円

■司馬遼太郎 著

竜馬がゆく

南種子中(熊) 中村 洋 一

「清君、刀はないか。」

生まれて初めて夢中になり、生まれて初めて「無意識に流れる涙」を体験し、本の魅力を感じた作品。「歴史小説」としてよりも「生き方」に示唆をもらった気がする。こんな人を目指して生きようと思ってきたのに……どこでどう間違えたか。もともとの資質が違ったか。「無意識に流れる涙」は、動乱の幕末に一脱藩浪人が歴史を変えるような大偉業を為し得た痛快な奇蹟や幕末風雲児と称される彼の破天荒な生き様に感動したからではない。それは回天の章、竜馬最期の件に因る。時は慶応三年十一月十五日の夜まで遡る。周知のとおり、新選組や見廻組、紀州藩等、多くの人たちの怒りを背に命をねらわれる身となった竜馬と中岡慎太郎は互いを変名「才谷梅太郎」「石川清之助」で呼び合い、双方の身を案じ合っていた。しかし、ついに京都「近江屋」で二人は襲撃されてしまう。刺客の太刀を前額部に受け、致命的な傷を負った際、彼が発した冒頭の台詞。この場に至ってもなお

友の身を案じ「清君」と変名で呼んだ彼の優しさに鳥肌が立ち、涙が溢れた。人を思いやる強さをもった優しい人になりたいと強く思った。その後、司馬氏の作品を中心に様々な書と出会い、感動、共感しては涙を流してきた。でも、

以来「無意識に流れる涙」には覚えがない。しかも定期的に「読み返し」ているのはこの作品だけである。司馬氏の描いた竜馬像は、史実に超えている点があるかもしれない。しかし、歴史上の人物像を日本人に固定化させた作品は、吉川英治氏の「宮本武蔵」とこの作品だけだと思ふ。とにかく、読み返すたびに多くの示唆を与えてくれる傑作である。もし、司馬氏の描いた竜馬のように常に他者を思いやれる強い「優しさ」と改善的発想を超越した「改革的発想」を兼ね備えた教師が一人でも多く現れたら、令和の学校は、大きく変わる(好転する)と思ふ。

文春文庫 八四三円



■原 マサヒコ 著

トヨタの非常識な仕事のルール

奄美高 田 中 耕一郎

筆者によるとビジネスパーソンは年間平均で「百五十時間」をあることに使っているらしい。それは、「モノを探している時間」だそうだ。次に挙げる事例は、まるで私のことをどこか

で見ているかのような指摘であった。

- 1 デスクに書類が「平積み」になっている。
- 2 PCの中のファイルがフォルダに入っているものもあれば、出ているものもある。
- 3 アルバムのようなものに名刺をファイリングして管理している。

トヨタには「モノを探すな、モノを取れ」という言葉があり、モノは「探すのではなく取る」というレベルにまでせよ」という意味だそう。書類を平積みにしてしまうと見つけにくく取り出しにくい。しかも崩れやすい。

「書類は立てる」ことを基本とし、ファイルの背表紙にラベルを貼る。PCのファイルは名称や置き場所に自分なりの統一ルールを設ける。名刺は、写真をとりデジタルツール(アプリ)で保存し管理する。デジタルなので検索も簡単。

確かそのようなアプリが私の携帯にも入っていたような…。「モノを探す時間」が減ると本当に仕事に使える時間「可処分時間」が増え、様々な事象に対する判断スピードも上がるなど、好循環が生まれる。

「トヨタの常識は、世界の非常識」と言われるようにトヨタの現場では生産性向上や問題解決、人材育成などの場面において独特の考え方が存在している。時価総額において日本一であり続けるトヨタという会社の「根幹を支えているルール」がいくつもある。著者は、神奈川トヨタ自動車株式会社にメカニックとして入社し、整備技術を競う社内の「技能オリンピック」で最年少優勝に輝いている。その経験に裏打ちされた言葉には、納得させられるものがたくさんあった。すべて実践できないまでも凝り固まった価値観を少しでも打破すべく、機会があれば読み返している。

三笠書房 七一〇円



■川島隆太 監修 横田晋務 著

「やつてはいけない脳の習慣」 小中高生七万人の実証データによる衝撃レポート

天保山中(市) 大平公明

各学校において、児童生徒のスマホやゲームの指導には苦慮していることと思います。この本は仙台市の小中学生約七万人を対象に調査した結果をもとに解析し、スマホ使用が学力に与える深刻な影響について脳科学の観点から書かれています。

スマホの使用時間が増加すると成績は下がるとは当たり前のような気がしますが、さらに、二時間以上学習しても四時間以上スマホを使っているとスマホを使わずほとんど学習をしない子どもと同じか、それ以下の成績になってしまう事実が述べられています。また、スマホのアプリの中でも特にLINE等の通信アプリが成績に悪影響を与えるようです。しかも、その後アプリの使用をやめたとしても注意の集中や切り替え、衝動的な行動を抑える機能に関わる重要な領域の一つである脳内の前帯状回という部分の形が変わってしまう、集中力や注意力の低下につながるのではない

かと考えられています。

ゲームについても中毒性が高く、依存症を引き起こし、脳の発達を遅らせてしまうようです。

それでは、どうすればよいのか。特効薬はないようです。今まで言われているとおり、スマホやゲームはやめることが一番良いようですが、それは無理なので、子ども自身が一時間以内の利用に制限すること、また、家族の関わりが大切だということです。つまり、親子のコミュニケーションを増やし、朝食やバランスを考えたいですが、家庭が精神的な安らぎを与える場所になるよう事例を基に根気強く取り組んでいくしかないようです。

青春出版社 八八九円



学生時代、日本中をあちこちと旅をした。時聞はあったが、お金に余裕があるわけではないので、バイクにキャンプ道具を積んでの野宿旅がほとんどだった。キャンプ場はもちろんのこと、町はずれの河川敷や公園、バス停や駅で寝たこともある。寝袋で寝ていたせいとか、いまだに狭い所でも平気で眠れるし、寝相はいい方だ。若いと周りの大人はとて親切で、食材、食事の提供は言うまでもなく、「パンでも買いなさい」とお金までいただいたこともある。でも、そのほとんどは、感謝を伝えただけで、連絡先や名前を控えたことはない。今思えば、ずいぶんと厚かましくて世間知らずだったと後悔している。

さて、前置きが長くなったが、最近世間では、空前のキャンプブームなのだそう。週末になるとおしゃれなテントがキャンプ場に立ち並び、旗や電飾といった飾りつけがさ



「キャンプ熱ふたたび」

隈之城小(北) 萩原聖司

そんな教職生活の中でも、二つの社会教育施設に勤務務させていただいた五年間は、自分のスキルを生かせる最高の舞台であったと思う。どうすれば、利用者が参加してよかつたと思えるような企画になるか、あれこれと体験活動のプランを立てるのが楽しくて仕方なかった。今は、チャンスを与えてくださった方々に、心から感謝している。

さて、教師生活もゴールが見えてきたと思つたら、定年延長となり、年金もお預け。今は、アウトドア三昧の生活を妄想しながら、現実に立ち向かう毎日である。もし、この投稿でキャンプに興味を持たれた方がおられたら、ご一緒にいかがだろうか。これまで知らない、新たな世界に気づくことができるかもしれない。

れ、実ににぎやかだ。本屋に行くとキャンプやアウトドアに関わる書籍が所狭しと並んでいる。グランピングなどという至れり尽くせりのキャンプも人気だという。流行が広がるとお気に入りの場所がなかなか使えないが、このブームのおかげで、キャンプ道具も随分と進化して、野外での活動もグッと楽に楽しくなった。以前は、テントにマット、寝袋で、地面の固さや冷たさを感じながら寝ていたが、今はコットという簡易のベッドやエアマットを使うと、快適に寝ることができる。たき火も直火で行わず、たき火台を使って安全かつ効率よく火を扱えるようになり、火を見ながらお酒を飲むなんて贅沢が、簡単にできるようになった。そして何よ

りこのブームがありがたいのは、「ソロキャン」という言葉が広まったことだ。以前は、一人でキャンプ場にやって来るのは、旅をしている若者ばかりで、オジさんが一人でテントを張ろうものなら、周りの家族連れなどから哀れな目で見られたものだ。子どもが小さいうちは、家族でよくキャンプにも行ったが、時間とともにその機会もなくなった。その後も登山の時に限って、一人キャンプを楽しんできた。今、このブーム下で、オジさんも堂々と一人優雅にテントを張って、自然を満喫できるようになった。お気に入りの場所にテントを張り、好きなものを作って食べて、たき火を見ながら星空の下でのんびり

り過ごす。夜が明ければ、冷たい空気を吸って散歩したり、山に登ったり。それでも時間があれば、椅子に座ってのんびりと、自分で淹れたコーヒーを飲みながら読書に浸る。うーん最高だ！

しかし、こんな幸せな時間は校長職を拝命して以来、行けたのは一度だけ。コロナの影響で県外には行けず、週末も自宅を離れられない日々が続いたため、思うようには動けない。背負う責任の重さを感じながらも、自然にどっぷり浸かりたいという思いでいっぱいだ。最近は大動画の投稿を見ながら、北海道や信州などの大自然の中に身を置く自分を妄想して、まったり過ごすのも気に入っている。



トカラ列島最南端の有人島 宝島

宝島小中（郡）下村 尚

一 はじめに

隆起したサンゴ礁でできた島で、中央部には二百九十一・九メートルのイマキラ岳がそびえている。上空から島を見るとハート型をしていて、昔イギリスの海賊が財宝を隠したとの言い伝えも残る。

昭和五年に宝島尋常小学校が発足し、昭和四十八年に宝島小中学校となり、現在に至る。全校児童生徒は二十一名のうち九名は山海留学生となっている。

二 校区の概要

宝島は、本土から南西約三百キロメートルに位置し、十島村最南端の有人島である。島の北東部には亜熱帯の植物が生い茂り、南西部には鍾乳洞もあり、神秘的な景観を呈している。

気候は亜熱帯性で、海の透明度が高く、その青さは「トカラブルー」と称される。海岸

一帯の魚種も豊富である。主な産業は農業で、なだらかな山の斜面の家の畑で亜熱帯性の果物を多く栽培している。また牛の飼育も盛んで島の両端には広大な共同牧場がある。

集落は北部の平地に集中し、港から学校まで約八百メートルの主要道路周辺に、役場の出張所や郵便局、診療所、温泉、民宿、売店などがある。

島の生活では神事や祭りが大切にされ、昔から継承されている行事も多い。

児童生徒数は昭和三十八年の百十九名をピークに年々減少しているが、学校と地域が一体となって取り組む山海留学生の募集や、Ｉターンによる定住者の増加で、学校、地域が活気づいている。

三 スチールパンの魅力

コロナ禍で二年間中止となっているトカラ列島島巡りマラソンの最終地点となる宝島では、参加者との交流会も行われ、その時スチールパンでの歓迎の演奏が行われてきた。また、十一月に行われる文化祭でも、児童生徒、島民の有志による演奏発表が行われる。スチールパンと言えばカリブ海の島国、トリニダード・トバゴ共和国で発明されたものであるが、なぜ宝島でスチールパンなのか。

テレビ局の企画でジャンベ演奏の案があったそうだが、様々な理由から見送られた。新たに宝島ならではの楽器としてスチールパン

の演奏企画案が役場に通じ、現地に行つてスチールパンの作成や演奏方法を学ぶとともに、現地の方が来島し、指導をしてもらっている。今から約二十五年前のことである。

それから今日まで島民有志の「スチールパン・オーケストラ」と、児童生徒の「マリinkinズタカラ」がいろいろな機会に演奏している。ドラム缶とは思えないとてもクリアで透き通った音がする。この音色は、「世界で一番、人の心を癒す音」とも言われている。

十島村では、コロナ禍で外部との交流が少なくなった二年前から、「健康のために体を動かそう」と言う意図で、十五時になると島内放送でラジオ体操操十島の歌が流れる。毎週金曜日は、スチールパン演奏の十島の歌が流れ、一週間の疲れが癒しの音で洗い流されていく。

四 おわりに

宝島の玄関口である前籠港には、巨大な壁画がある。今年度は、この壁画を新たに描き直す壁画プロジェクトが始動する。壁画をデザインするアーティストもいるが、描く活動には島民も参加し、年内には完成する予定である。新たな壁画と、美しい音色のスチールパン。芸術・音楽の島としての新たな宝島が今後の魅力となってくる。早いコロナの収束を願うばかりである。

*** ころの詩 ***

中學の校庭

われの中學にありたる日は
 艶めく情熱になやみたり
 いかりて書物をなげすて
 ひとり校庭の草に寝ころび居しが
 なにももの哀傷ぞ
 はるかに青きを飛びさり
 天日直射して熱く帽子に照りぬ。

萩原 朔太郎

一般財団法人校長会館だより

校長異動

○新任 令和四年七月一日付

始良市立三船小学校長

川原 典明氏

○新任 令和四年七月一日付

曾於市立岩川小学校長

上原 大樹氏

○転任 令和四年七月一日付

鹿兒島市立紫原小学校長

川畑 敏彦氏

(前始良市立三船小学校長)

教育長異動

○新任 令和四年七月二十四日付

東串良町 金久三男氏

(元鹿兒島市立荒田小学校長)



編集

後記



今年の梅雨は時折激しい雨に見舞われたものの、梅雨明けが早く、厳しい夏の暑さが続き、熱中症が心配されます。コロナウイルスの感染者は相変わらず多いですが、学校においては感染対策に気を付けながら様々な行事に意欲的に取り組み、ようやく終業式を終えて、夏休みに入っていることでしょう。

さて、中学校においてはこの時期九州大会予選を兼ねた県総合体育大会が始まっていることと思います。来年度以降、この大会の在り方が大きく変わろうとしています。つまり、全国中体連が国の方針に従い、学校単位で行われていた大会にクラブチームの参加を認める決定をしました。しかしながら、具体的な運営等の在り方や判断については、各県に任せられるところが多くあり、学校現場の混乱を招かないようにするためのクラブチームの参加資格の認定や参加方法など検討すべき課題が山積しています。さらに、土日の部活動の外部指導者の活用をまず手始めとして、将来的には学校の教育活動の一環として行われてきた運動部活動を学校から切り離す方向に進んでいます。

このことは中学校における課題ではあります。学校においては国の方針を踏まえて対応しなければならぬことが多くあります。私たちがいかなる課題があるうとも相互に協力し、智慧を出し合いながらよりよい「鹿兒島の教育」を目指していかなければならないと考えています。広報部の校正の仕事をしていただき、三年目になりますが、先生方の熱い思いや実践がとても参考になります。

最後にご多用の折、玉稿をお寄せいただいた執筆者の皆様にご多謝し、御礼を申し上げます。

天保山中学校 大平公明